

Title	Analogia研究[I] : トマスのanalogia attributionisにみる存在論的基礎とこれを廻る問題
Sub Title	Study in analogy (I) : ontological basis in analogia attributionis of St. Thomas, and Cajetanus
Author	箕輪, 秀二(Minowa, Shuji)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1961
Jtitle	哲學 No.39 (1961. 3) ,p.29- 52
JaLC DOI	
Abstract	Cajetanus gives the two characteristics of Analogia Attributionis -first, the existence of the <i>primun analogatum</i> in the analogy, and secondary, the <i>designatio extrinseca</i> from primary analogate to the secondary analogates. In this analogy of St. Thomas, there is the ontological likeness between the analogous property in the primary analogate and that in the secondary analogates. For St. Thomas, in other words, the existence of this ontological basis enables analogous property to designate the secondary analogates extrinsically. In this paper, I intend to show the ontological basis in his analogy by the elucidation of the double designations in <i>veritas</i> , <i>bonitas</i> , <i>ens</i> . In the analogy of Cajetanus, the <i>designatio extrinseca</i> is the consequences of the conceptual operation (<i>secundum intentionem</i>) in the terms of the analogy, and it is extrinsic in the true sense of the words. For this reason, he defines <i>analogia secundum intentionem solum</i> as the <i>analogia attributionis</i> . According to him, this analogy is improper and is not given dignity as the metaphysical analogy. And he defines <i>analogia secundum intentionem et secundum esse</i> the <i>analogia proportionalitatis</i> , then we could assume that Cajetanus treated the two aspects of analogy of St. Thomas separately, if we can see St. Thomas had taught the <i>esse</i> (the intrinsic ontological basis) in this analogy. But some problems prevent this assumption from being acceptable. these problems are: 1) the existence of the <i>primun analogatum</i> in this analogy of St. Thomas, in which the analogous property is properly realized and to which the analogous property in the secondary analogates attributes, 2) the existence of "the mixed case" in which two analogies (<i>attributionis</i> , and <i>proportionalitatis</i>) are contained. The elucidations of this problems will lead us to another paper in which the significances of the <i>analogia proportionalitatis</i> in St. thomas and Cajetanus are clarified. (to be continued)
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000039-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Analogia 研究 [I]

——トマスの *analogia attributionis* にみる存在論的基礎とこれを廻ぐる問題——

箕 輪 秀 二

一

カエタヌスが “*De Nominum analogia*,” において、*analogia attributionis* に与えた諸条件を要約すれば、次の二点になると思う。^(註1)

すなわち、この *analogia* においては、類比の名辞は常に *designatio extrinseca* によつて述べられる。第二は *primum analogatum* の存在である。この *analogatum* においてのみ、類比の名辞によつて示される類比の本性が一義的に内的に実現されている。他の類比項に対しては、類比の名辞は、この *primum analogatum* におけるこの本性との関係において、外的に与えられるのである。

これら二つの条件によつてカエタヌスはこの *analogia* の形而上学的価値を否定したのである。

我々は、カエタヌスのこの *analogia* の定義と、そこから生ずる形而上学的価値の否定を足掛りとして、トマスの *analogia attributionis* を考察してみたいと思う。したがつて我々の問題は次のようになる。

すなわち、第一にトマスは *analogia attributionis* を我々に述べたかどうかという問題である。この問題は同時にまたトマスにおける *analogia* に前述のカエタヌスの定義が、すなわち *primum analogatum* の存在と、またそこにのみ内的に実現されている類比の本性の、各項に対する *designatio extrinseca* がどのように考えられているかという検討になるのである。本稿においては、特にトマスのこの *analogia* の分析の過程において見出される *designatio extrinseca* が持つ内的な *ontological basis* の検討を中心として、トマスの *analogia attributionis* が示すものとカエタヌスのそれとの性格の検討に進み、さらにカエタヌスの *analogia attributionis* と *proportionalitatis* との内的な密接な関連について生じて来る問題を併せて考察してみたいと思う。

二

我々はまずトマスについての *analogia attributionis* を検討せねばならない。この問題に対して最初にカエタヌスの述べるような *analogia attributionis* をトマスが実際に述べたかどうかを問題にせねばならない。

トマス自身はもちろん *analogia attributionis* という名辞を用いてはいない。^(註2)したがつて一応我々はトマスが意味する“*attribuere*”を考察せねばならない。しかしトマスが用いたこの言葉には、内的な分有 (*intrinsic attribu-*

tion) の場合も考えられるし、また外的な分有 (extrinsic attribution) の場合もあり、これらからの分析からは、明確に “attribuere,” の意味を捉えることが出来ず、したがってトマスが analogia attributionis を述べたか否かについては理解することができない。しかし我々が “De Principii Naturae,” において述べられている “attribuere,” をみるとある意味でカエタヌスの attribution によく似ていると考えられる。

たとえばすべてのものは、ens と呼ばれ得るものの主体となる「実体」との関係に置かれることによつて (attribuntur substantiae), ens と呼ばれる場合のこと、この場合の “attribuere,” は、ある共通の名辞は、ある一つのもののとの関係のゆえに種々のものに与えられることを意味しているが、しかしこれとても明確にトマスが ens という名辞がその他のものに対してに、designatio extrinseca よつて述べられるということを示していないように思われる。したがって我々はトマスの用いる “attribuere,” の分析からは analogia attributionis の存在を明確に把握することができないようである。

しかし “De Veritate,” の二箇所においてカエタヌスの analogia attributionis に相応すると考えられる叙述を見出すことができる。そこにおいてトマスは、創造物は神自身から取り出された概念によつて extrinsece に示されると云っている。したがって我々はこの “De Veritate,” の考察によつてトマスの analogia attributionis の存在とそれに与えたトマスの考えを明らかにしてみたいと思う。

まず一つの “De Veritate,” について考察しよう。^(註5) ここでトマスは、創造物はすべて、神の Bonitas によつて bonum と呼ばれるものであるかを問題にして、これに対して二重の解答を与えている。創造物は創造物そのものの中に存在する bonitas によつて、すなわち自己の中に存在する bonum を示すために bonum と呼ばれる。bonitas

という名辞は創造物の中に内在するものを示しているものであり、したがって創造物の形相に属しているものを示しているのである。この *bonitas* は事物の中に存在する *bonitas* に関係しているものであり、事物はこれによつて *bonum* と呼ばれるのである。ところでトマスは、上述の意味ではなく、神の中にのみ存在する *Bonitas* によつて、創造物は *bonum* と呼ばれると、最初のものとは異なつた仕方であつて述べている。したがつて創造物について述べられた *bonitas* は創造物における *bonitas* を示すのではなく、神の *Bonitas* の不完全な、あるいは移行された意味での *bonitas* を示すのである。したがつてこの意味で用いられた *bonitas* は、神の中の *Bonitas* への依存において述べられるのであり、これからの、創造物への *designatio extrinseca* によつて行なわれるのである。

上述のごとく、同一の問題に対する異なつた二重の解答を与えたことについては、トマスがこの神と創造物との間に見る因果関係の考察から生じたと見ることができる。神を第一原因として考えるならば、またその限り、神は創造物の *Bonitas* の原因でもあるとすれば、創造物の中には神の *Bonitas* を同程度、もしくはそれに類似した *Bonitas* が存在すると思えられる。したがつて神に似た *bonitas* (もちろん不完全な形ではあるが) によつて創造物は、*bonum* と呼ばれよう。しかも神が創造物の *bonitas* の *causa exemplaris et efficiens* と考えられる限り、創造物は神における範型因としての *Bonitas* によつて *bonum* と呼ばれるのである。

bonitas は一方創造物の中にある本性 (*bonitas*) によつて内的に、他方神の中にある *Bonitas prima* によつて *extrinsece* に創造物に与えられるということになるのである。^(註9)

この二重の *designatio* に対していかに解したらよいであろうか。トマスはこの二重の *designatio* によつて何を我々に示めそうとしているのか。

この問題について“De Veritate,” 1. 4. に従って、より詳細に考究してみたいと思う。またそれによつてトマス
の *analogia attributionis* の所在と、この *analogia* における *designatio extrinseca* の特異性について明確にす
ると同時にカエタヌスの *analogia attributionis* との相異も明かにしたいと思う。

“De Veritate,” 1. 4. によつて、トマスは上述した *bonitas* の例と同じ型で *veritas* について論じている。すな
わち *veritas* は *una veritas* によつてすべてのものが *verum* と呼ばれるか否かについて論じている。

veritas の定義から出発して、トマスは本来的な一義的な意味で云われる *veritas* と二義的な意味で述べられる
veritas とを区別している。すなわち *sanitas* が人間の中に、本来的に存在する本性から述べられるように、*veri-*
tas が知性の中に存在する場合には、この *veritas* は本来的な一義的な *veritas*, となり、また人間の中にある *sa-*
nitas が人間以外の尿や薬について述べられるように——これらの尿や薬が人間の健康を生じ、あるいはこれを保持
する限り、すなわち人間の中の *sanitas* に関係する限り——、知性との関係において事物の中に *veritas* が存在す
ると考えられる場合、*veritas* はこの二義的な意味での *veritas* と考えられる。したがつて *veritas* はトマスによ
れば、一義的にそして本来的に神の知性の中に存在し、二次的にしかも本来的に人間の知性の中に存在し、さらに二
次的にしかも非本来的に事物の中に存在すると考えられる。事物は神の知性との関係においてのみ *verum* と呼ば
れるのである。ところで人間の知性に関しては、事物は一義的な意味を持つのである。人間の知性は神の知性との関
係において *verum* となる事物を知る限りにおいてのみ、*verum* となるのである。事物が人間の知性との関連にお
いて *verum* と云われる場合、この *veritas* はたしかに人間の知性とは関係は持つが、しかし事物はこの場合の
veritas によつては *accidental* なものである。人間の知性の存在を否定したとしても、なお事物の *veritas* は神の

知性との関連において成立するのである。したがつて、もし *veritas* を一義的な本来的な意味にとるならば、神の知性との関係においてすべてのものが *verum* と云われる。すなわち一ヶの *veritas* によつて、この *una veritas* との依存によつてすべてのものが *verum* となるのである。ところで *veritas* を二次的なしかも本来的な意味にとるならば、すなわち人間の知性との関連において、*verum* と云われる場合、それぞれの人間の知性の中にそれぞれの異なつた *veritas* が存在することになるのである。さらに二次的な非本来的な意味にとるならば、すなわち事物における *veritas* をとるならば、事物の数だけの事物の *veritas* が存在することになり、その事物そのものについてのたゞ一ヶの *veritas* が存在するということになる。したがつて *veritas* は、人間の中において事物的に考えられる *sanitas* との外的な関係において薬や尿が、*sanus* と呼ばれる場合と同様、知性との関係において考えられる場合——この場合 *veritas* は知性における *veritas* の *designatio extrinseca* によつて *verum* と呼ばれるのである。——つて、事物の中に存在する *veritas* によつて云われるのではない。——と事物の中に存在する *veritas* によつて *verum* と云われる場合とがある。これはちやうど食物の中に存在する性質（健康にするという）によつて、これが *sanus* と呼ばれるのと同様である。

さてこの *veritas* を知性の側から見るとき、前述したように二つの知性——神と創造物との——との関係が考えられる。人間の知性は事物から知識を受けとる限り、そしてこの知識が事物に依存する限り、人間の知性における *veritas* は二次的なものとして考えられ、神の知性における *veritas* は一義的なものと考えられる。したがつて *veritas* を神の知性、人間の知性、また事物において実現されている *veritas* として考えるならば、すなわち各々に実現される *veritas* それ自体で考えるならば、*veritas* はすでにそれぞれのものに存在する本性に従つて考えら

れるのである。神の知性における *veritas* は神の中に存在する内的本質を述べているのであり、人間の知性における *veritas* は人間の知性の中に存在する本性を示しているのである。それ自体として考えられる *veritas* も相互の関係において考察される場合、この *veritas* の *designatio* も *extrinsece* なものとなるのである。この意味で考えられる場合、すべてのものは、神の中の *Veritas* との関係において *extrinsece* に *verum* と呼ばれるのである。したがって、*veritas* が *designatio extrinseca* によって述べられるか、あるいはそのものの中の本性 (*forma inherens*) によって *intrinsece* に述べられるかは、この *veritas* をいかなる意味にとるかにしたがって変ってくるのであつて、全く別物ではないということをトマスは意味していると考えられよう。この考えはまた前述した *bonitas* についても全く同様に適用されるのである。

さて *bonitas*, *veritas* についての二重の *designatio* については、上述の観点からすることによつて、トマスの意味することが理解できるのであるが、しかしこの二重の *designatio* は結局のところ *designatio extrinseca* に基礎を置くことによつて成立すると考えられる。すなわちトマスは *bonitas*, *veritas* については、神の中に存在する *Bonitas*, *Veritas* によつてすべてのものは *bonum*, *verum* と呼ばれるのであつて、この *designatio* は *extrinsece* に述べられるのである。内的な本性 (*bonitas inherens*) にしたがつて、創造物がそれ自体として *bonum* と云われるのであるが、しかし創造物が神の結果として考えられる限り、その限り神の似象としての *bonitas* をその中に持つていると考えられる。この場合の *designatio* の基礎は原因に対する結果の類似と考えられるのである。あらゆるものは、多かれ少なかれ程度の差はあれ、事物の原因としての神とのかすかな相似のゆえに、*bonum* と呼ばれるとトマスは “*Summa Theol.*” において述べている^(註7)。 *veritas* についてもこれと同様のことが云える。人間の知性の中の

veritas は神の Veritas の image とされ、すべては神から生じて来ると考えられるのである。これはまた primum analogatum において本来的に実現されている本性に extrinsece に他の類比項について述べられることである。類比名辞が示す内容は primum analogatum にのみ本来的に実現されて、各類比項においてはこの名辞が示す内容は、primum analogatum との関係に立つ限りにおいて述べられるのである。

トマスにおいては veritas も bonitas も結局は primum analogatum —— 神における Veritas や Bonitas によつて他の類比項（創造物）が verum もしくは bonum と呼ばれるのである。しかもこの designatio は extrinsece な関係に立つ二つの類比項の間におこなわれるのである。

我々は以上の二つの “De Veritate” の考察からトマス自身が analogia attributionis について実際に述べていることを知るのである。ここで述べるトマスの analogia は多くの点でカエタヌスのそれと相応しているのを見出すことができるのである。

しかし我々はまた明確な相異をこれら二つの analogia attributionis の間に認めねばならない。すなわちトマスにとつては創造物が神の中にある本性 (Veritas, Bonitas) に従つて述べられるとしても、しかしこの概念が指示するところのものは何ら変化を持たないこと、すなわち創造物には神の中に存在する本性——それがたとえ不完全なものであろうとも——に従つて、この本性に類似したものが述べられるのであつて、カエタヌスが述べる analogia のごとく、primum analogatum との各々の異なつた関係において類比の名辞が類比項に述べられるのではないのである。カエタヌスの analogia における類比概念は一方において primum analogatum に見られる本性を示すと同時に、この本性と他の類比項のそれぞれ異なつた関係を示しているのである。この類比概念はたんに primum ana-

logatum にある本性を述べているのではない。むしろこの場合の類比概念は *primum analogatum* の中に存在する本性との各々異なつた関係を示すために用いられるのである。この概念にはさらに一つの新しい意味が加えられるのである。すなわち *primum analogatum* の中に存在する本性との関係が附け加えられるのである。この点においてカエタヌスとトマスの *analogia* における相異を認めることができるのである。

とにかく我々はトマスはカエタヌスの述べる *analogia attributionis* に見る二つの要素を持つた *analogia* について実際に述べていることを明確に見ることができるのである。トマスの *bonitas* と *veritas* との *analogia* において、我々は類比概念によつて示される内容が本来的に実現されている *primum analogatum* の存在と、またこの *primum analogatum* において本来的に実現されている本性とのそれぞれの外的な関係において他の類比項に類比概念が述べられるということを見て来た。

三

ところで *ens* が *analogia* によつて述べられるとすれば、いかなる型の *analogia* になるであろうか。これは *analogia attributionis* によつて述べられるであろうか。*bonitas*, *veritas* は、トマスによれば、*ens* の各々の *modus* として考えられる。したがつて、この点から *ens* も *veritas*, *bonitas* と同様にこの *analogia* にしたがつて述べられると考えられよう。トマスは、実際に、存在するものはすべて神の *ens* から存在すると同時に、事物そのものの内在的な本性によつて存在すると云われる、と考えたであろうか。

これらの分析によつて得られる結果から、トマス自身のこの *analogia* の持つ一つの重要な意味が明確になつてく
ると思われる。

まず問題になるのは *analogia attributionis* の型で *ens* が述べられることをトマスが考えたかどうかという点である。神と創造物における基本的な一般的な相似は共に *esse* を持つているということである。これは神と創造物との因果関係に基づいて考えられることである。創造物と神は、もちろん異なつた仕方にはあるが、*esse* を所有している。この点では *bonitas, veritas* の場合と同様に云えるのである。したがつて神と創造物においてはそれぞれ
の内的な本性 (*esse* を所有するという) にしたがつて *ens* と呼ばれる。ところで創造物はすべて *causa exemplaris et efficiens* としての神との関係において *esse* であると云われるということについてはトマス自身はあまり
明確にしていけないのであるが、*“Sententia,”* において、^(註8) 彼は *causa efficiens* としての神の *esse* はあらゆるものの
esse であると述べている。さらに論理的な関係よりはむしろ存在論的な関係において、*“あらゆるものがそれによつて存在すると云われるところの神の *esse* が存在する。しかし一方、それによつて事物が形相的に (formaliter) 存在すると云われるそれぞれの異なつた *esse* がそれぞれの事物の中に存在する”* という意味のことを述べている。^(註9)
ens も、トマスによれば、二重の *designatio* によつて述べられるものであり、一つは神から (*primum analogatum*) の本性によつて、一つは個々のものの中に存在する本性 (*esse* を所有していること) によつて述べられるのである。この事情は *bonitas, veritas* の場合と全く同様に考えられる。したがつてトマスによれば、*ens* も *analogia attributionis* によつて述べられることを認めてよいと思われる。しかしこの問題を詳細に考えるとき、我々は一つの重要な意味を見出すことができるのである。

もし *ens* が *analogia attributionis* にしたがって述べられるとすれば、この *analogia* の定義によつて、すべてのものは *primum analogatum* にある *esse* に従つて、すなわち神の *esse* によつて *ens* と呼ばれる。もちろん、この場合の *designatio* は、*extrinsece* なものである。尿や薬は人間の健康との関係に立つとき、——すなわちそれが人間の健康の徴であり、これを維持、増進するものと考えられる限り——これらは *sanus* と呼ばれるのである。同じことが上述の *veritas*, *bonitas* についても言えるのである。ところでこの *designatio extrinseca* がこの *analogia* の特性として考えられる限り、我々が *ens* の *analogia* を考える場合、一つの困難に遭遇するのである。尿、薬は上述のことから明らかのように、人間の *sanitas* との関係に入る限り、*sanus* と呼ばれるのであるが、しかし尿、薬は各々それ自身における本性によつて本来的に尿または薬と呼ばれるのである。言い換えれば、*sanus* と呼ばれようと呼ばれまいと、とにかく薬、尿として実際に存在するのである。しかし或るものが他のものとの関係において *extrinsece* に *ens* と呼ばれる場合、この或るものは自己自身の中に *ens* を所有しないということになり、これはまた存在しないこと (*nihil*) ということを示すことになる。したがつて或るものが *designatio extrinseca* によつて *ens* と呼ばれる場合、このものは *non-esse* ということになってしまうのである。したがつて *ens* を或る存在するものに *extrinsece* に述べる場合、これは *ens* の定義に矛盾することになるか、あるいはまた、何かこれらの間の実在的な内的な相似の関係を示すところのものを捨象したと考える場合かのいずれかの場合と考えざるを得ないのである。*ens* の場合に見る *designatio extrinseca* は結局それら類比項の間にすでに *esse* の存在を予想した場合においてみられるのである。*designatio extrinseca* は相互の間の内的な類似性の存在を予想せざるを得ないのである。したがつてまた *ens* は創造物が神の *esse* との相似において——これらの間の因果関係によつて——すでに

esse を所有しているものとして考えられる限り、あるいはその場合においてはじめて analogia attributionis の一つの項となり得るのである。

esse を共にすでに所有している——内的な類似を持つ——もの間にはじめて、ens の designatio extrinseca が成立し、また veritas, bonitas が ens の modus として (ratio entiae) 考えられる限り、これらのものが ens の内的類似を基礎にしているがゆえにまた bonitas, veritas の間に designatio extrinseca が成立すると考えられよう。したがって前述の analogia attributionis において、その例を bonitas, veritas にと限つたことの理由が、理解されると考えられる。

これらの考察から analogia attributionis についての一つの重要な意味を明らかにすることができる。すなわち上述のことから明らかのように、bonitas, veritas, ens について述べられる場合のこの analogia においては常に、これらのものの中にすでに esse を含んでいる限り、これらは extrinsece に designatio されるというものである。言い換えれば、この analogia において、designatio が許されるのはこの analogia の各項の各々がすでに esse を所有している限りにおいてであると云える。すでに所有しているこの esse は各項の各々の中に存在する内的な類似と考えられる。したがってこの analogia は、各項の間の内的な存在論的な類似を前提してはじめて designatio extrinseca が許されるのである。この analogia における designatio extrinseca はこれらの概念が持つ本性から生ずるのであつて、決して内的な類似の排除もしくは無視によるのではない。この点カエタヌスの designatio extrinseca とは類を異にするのである。^(註19)

上述したことから直ちに結論へと急がずなお一つの問題について考察してみよう。この問題は実体と偶性について

述べられる *ens* の場合、この *ens* はこれらのものに対して前述した型の *analogia attributionis* によつて *designatio* されるか否かについて考察したい。

アリストテレスは “*Metaphysica*,” においてこの *ens* は *sanitas* が尿や薬等について述べられると同じ仕方である。実体と偶性について述べられると云つてゐる。すなわちアリストテレスによれば、この場合の *ens* は *analogia attributionis* に属すると思われる。トマス自身もこれについては “*Metaphysica*,” 註釈の四巻と十一巻において、*ens* は “*De Principiis Naturae*,” において、同様のことを述べてゐる。しかも彼によればこの *ens* の *designatio* は “*Ethica*,” 第一巻においてさきに我々が見た *bonitas* の例と全く構造的に似ており、こゝでも *ens* が実体と偶性について述べられる場合には、二重の *designatio* によつて述べられると云つてゐる。一方においては、*ens* は実体の中の *esse* との関係において偶性について述べられると考えられ——これは、*sanitas* の場合に相應するものであり、*bonitas* が他のものとの関係、すなわち神の中の *Bonitas* との関係において *bonum* と云われるごとく——、また一方においては *sanitas*, *bonitas*, *veritas* がそれ自身として考えられる場合に生じたごとく、実体も偶性も共に *esse* を所有する限り、すなわちそれぞれの内的本性を持つそれぞれ異なつたものの *modus* と考えられる限り、*ens* と呼ばれるのである。前者の場合においては、*ens* は一般的な意味での *analogia attributionis* に属するものと考えられる。後者においては、これは実体もしくは偶性の中に内在する本性に関係して述べられると考えられる。いずれにしろトマスはこの場合の *ens* に関しては、アリストテレスの述べたような意味での、したがつてまたカエタヌスが考えた意味での、*analogia attributionis* を考えていたことは確かである。^(註1) たしかに偶性の *esse* は実体のそれにしたがつて生ずる。実体なしではいかなる偶性も存在しない。したがつて偶性の *esse* は実体のそれに必

然的に依存すると云われるのである。しかしたとえ偶性が実体の中にのみ、それにおいてのみ、それに依存することによつて生ずるとしても、また実体ほどの完全性を所有しないとしても、偶性の存在は実在的なものとして——*simpliciter* に考察されるならば——考えられる。したがつて、この場合の *ens* も *bonitas* 等においてみたとき、二重の *designatio* が可能となつて来る。この *ens* が実体と偶性に対して、*designatio extrinseca* をとるか、*intrinseca* をとるかはこの *designatio* が基礎とする概念によつて変わつて来る。すなわちこの基礎が実体の *esse* である場合には、偶性はこの *esse* との関係において *extrinseca* な *designatio* をとるのであり、またこの基礎が *simpliciter* に考えられ、各々のものの本性の面から考えられる場合には、偶性は *intrinseca* な *designatio* となるのである。この場合偶性と実体との実在的な関係がその基礎となつている。このようにみて来るとき、偶性について、*extrinseca* に *ens* が述べられる場合においても、*bonitas*, *veritas* 等に見たとき内的な関係、存在論的な内的な基礎を見逃すことができないのである。内的な存在論的関連が、もしくは類似が存在すればこそ、これらの間に *extrinseca* に *designatio* することが可能となつて来るのである。analogia の各項における相互の内的な存在論的な類似は *designatio extrinseca* の場合の基礎となつてゐるのである。

もちろんカエタヌスや彼に従うトミスト達は、この *analogia* における *designatio extrinseca* の考察に當つて、この *analogia* の各項の間に存在する共通な関係を否定してはいない。彼等の否定するのは、その中に類比の本性が本来的に実現されている *primum analogatum* 以外の項にはこの類比の名辭によつて示される本性が存在していないということである。したがつて彼等にしたがえば、類比名辭は、ある一ケの共通なもの、もしくは概念に対する各項の関係を示していると考えられるのである。言い換えれば、尿、薬、人間の健康等にとつて共通なものが、存在す

ることは彼等は認めるが、尿、薬が *sanus* と呼ばれる場合、この *sanitas* という概念はこれらのものの中に存在しているものを表示しているということを否定しているのである。*sanitas* が尿について述べられる場合、これは人間の *sanitas* との関係において、それが徴となる限り、すなわち *primum analogatum* への関係においてみられた尿としてのみ、成立するのであつて、*sanus* という名辞はこの関係を示す名辞として用いられるのである。しかし前述したごとく、これらの考えには、この *analogia* の持つ存在論的基礎への考察が故意にか、もしくは不用意にか無視されているのである。^(註12) この *analogia* における *designatio extrinseca* の場合、常に *primum analogatum* と各項との間の存在論的内的類似に基づく基礎の存在が、かゝる *designatio* を可能ならしめるという点に対する考察、すなわちこの *analogia* における存在論的側面への考察の欠如が、カエタヌスの考えの中に見出されるのである。原因と結果との関連の中においてみられる神と創造物、もしくは実体と偶性、人間の *sanitas* と尿、薬等にみられる *analogia* においては少くともかゝる存在論的内的な基礎が存在し、この存在的基础の下において *designatio extrinseca* が成立するのである。

もちろんトマス自身も “*Sententia*,” において上述の *analogia* の *designatio extrinseca* における存在論的考察に反するかのような命題を述べている。*sanitas* は人間の中にのみ本来的に存在するが、論理的に尿に関係すると云っている。これはたしかに単なる論理的な操作の結果と考えられる。この場合トマスは単なる論理的操作による *designatio extrinseca* によつて *sanitas* が述べられると考えているようである。こゝにおいては単なる論理的な関係が *designatio* の基礎となつており、何ら内的な存在論的内的類似に基づいていないように考えられる。たしかにこの場合の *designatio* は知的操作である。しかし *analogia* はすべて知的操作に由るものであつてこれに由らない *an-*

alogia は存在しないのである。したがって我々が問題とするのは、このことではなく、むしろいかなる内的基礎を持つて *alogia* の各項が *designate* されるかである。この論理的な操作も意味を持つためには、何らかの實在的な存在論的な基礎を持たねばならないのである。このような存在論的な基礎を持たない単なる知的操作に由る、論理的な関連の結果による *alogia* は結局 *alogia* とはならず、ついには *univocation* (一義的名辞) になつてしまふであろう。^(註13) この *alogia* において、*designatio extrinseca* によつて述べられる限り、そこには関係し合う相互の類比項の間には、内的な類似もしくは存在論的基礎が存在すると考えられるのである。^(註14)

以上我々はトマスにおける *alogia attributionis* の所在とその *alogia* に見る *desinatio extrinseca* についての意義を明らかにして来た。もちろんトマス自身、*alogia* について詳細な論理的な体系を何ら述べていないのであつて、我々はトマスの述べた *alogia* の実例の中から考察するという方法において、上述の考察をなして来たのであるが、しかし上述のところから、少くともトマス自身、特殊な意味における *alogia attributionis* を述べていたことは明らかである。トマスのこの *alogia* は少くとも形式的にはカエタヌスの考える *alogia attributionis* と一致する多くの点を持つている。しかしトマスに見られるこの *alogia* における存在論的な側面の分析に対しての十分な検討が、少くともカエタヌスにおいては、*alogia attributionis* において見られないのである。

四

さて我々が見て来たようにトマスの *alogia attributionis* においては、たしかにカエタヌスのいう意味での *de-*

signatio extrinseca が認められるが、しかしカエタヌスのごとくこれは単なる知的操作による外的な関係という論理的な関連のみを意味しているのではない。前述したごとく、かゝる論理的な操作の根底を我々が考察するとき、むしろこの analogia の各項における内的な存在論的類似もしくは基礎の存在において、はじめて designatio extrinseca が可能となるのである。analogia attributionis における designatio extrinseca に見る存在論的基礎の考察から、カエタヌスの analogia 説に種々の問題を提供するように思われる。

さて上述したように、トマスにおいて veritas, bonitas がそれぞれ analogia attributionis の型において primum analogatum との関係において designatio extrinseca によって述べられることを知った。しかし designatio extrinseca を可能にする基礎はこれら analogia の各項における内的な存在論的類似もしくは基礎であることを考察して来た。しかもこの基礎ないし類似は、それが ens の modus として考えられる限りにおいてであり、むしろこの ens が analogia attributionis において述べられる内的存在論的基礎は analogia の各項における esse の共有ということであつた。もちろんこの esse の共有は神と創造物における完全度(perfectio)の相異は存在する。このように考えられるとすれば、bonitas, veritas がそれぞれ designatio extrinseca にしたがって、analogia attributionis の型で、それぞれ bonum, verum と呼ばれるのは、結局のところ esse の共有という内的な存在論的基礎の上に立つてはじめて成立すると考えられる。——bonitas, veritas が ens の modus と考えられる限り——。したがって、veritas, bonitas についてトマスが考えた analogia は単なる概念上の操作、論理的操作ではなくして、むしろ存在論的基礎の存在に基づいて行なわれる designatio extrinseca と考えることができよう。上述のことく考えて来るところの場合の analogia はトマスの secundum intentionem solum ではなく、analogia secundum

intentionem et secundum esse と考えることができよう。事実トマスが“Sententia,”^(註15) において述べている実例を見ても明らかなごとく——このにおいては実体と偶性とに述べられる ens の場合を挙げている——これは我々が見て来たように、analogia attributionis において考察され得るものである。ところでカエタヌスはこのトマスの analogia secundum intentionem et secundum esse を analogia proportionalitatis として取り扱っているのである。しかも彼が形而上学的価値を持つ analogia として認めたこの analogia proportionalitatis という名辭はトマスが他の箇所^(註16)で、述べているところのものである。上述の考察からすれば、カエタヌスが analogia proportionalitatis を、——すなわちカエタヌスの考えでは analogia secundum intentionem et secundum esse を、しかも内容的にはトマスの analogia attributionis と一致する analogia を——形而上学的な、本来的な analogia として考えるというところにカエタヌス自身に矛盾が存在するということが考えられるのである。したがってカエタヌスの考える形而上学的な analogia が、彼にしたがつて、analogia secundum intentionem et secundum esse として考えられるならば、我々が意味する analogia attributionis は彼が云うごとく決して、形而上学的な価値を持たないものとして考えられなくなるであろう。

カエタヌスはこの analogia を、論理的な操作の結果としての designatio extrinseca にその特色を置き、さらに類比概念によつて示される本性の本来的な存在を primum analogatum において見るところから、この analogia を形而上学的な analogia から除外するということになったと考えられる。たしかにカエタヌスの考えるごとく、論理的操作にのみに analogia attributionis を限るならば、かゝる結果を招かざるを得ないであろう。なぜならば、この analogia の各項の間の内的な存在論的な類似ないし基礎を見過すならば、当然これは univocation と變つて

しまうからである。^(註17)しかし我々はたゞトマスにおいて神と創造物との間におこなわれる *analogia attributionis* を考察し、しかもそこに *designatio extrinseca* の存在をみ、神における *Bonitas, Veritas, Ens* という *primum analogatum* の存在をみて来た。しかしこれら *designatio extrinseca* がおこなわれるためにはすでにこれら各項の間に内的な存在論的な基礎が存在することを我々はみて来た。これらの考察からするとき、カエタヌスの *analogia* はトマスのそれとは大分趣きを異なつたものと考えられるのである。

ところで名辞の *analogia* を論ずるカエタヌスはこのような内的な存在論的な基礎の存在についての考察から、*analogia attributionis* ではなく、*analogia proportionalitatis* においてこの内的な基礎を考察したと考えられよう。したがつて我々がみて来た *analogia attributionis* における形式的な側面と内容的——存在論的側面とを區別して、しかも名辞を取り扱う場合の *analogia* の形式的區別として二つの *analogia* を取り扱つたと考えることができる。とすれば *analogia proportionalitatis* を *analogia secundum intentionem et secundum esse* としてトマスの命名を取り入れた理由も肯定できる。そしてまた彼が *analogia attributionis* に対する形而上学的価値の否定も、内的存在論基礎を分離して考察したと考えるならば、これも肯定し得るものである。^(註18)

五

しかしさらに問題は残るのである。

カエタヌスにおいては、あまり明確な形において述べられてはいないが、*analogia* 説に対しては彼に従う者にお

(註19) 我々が *analogia attributionis* の所在について考究して来た際の二重の *designatio* をいわゆる “mixed case”、として考察している。(註20) そしてこの mixed case において彼等は *analogia attributionis* (我々がみて来た神との関係において考えられる創造物の *bonitas* の場合) と *analogia proportionalitatis* (我々がみて来たそれぞれの段階における、各々の *simpliciter* に考えられる *bonitas* の場合) との存在を主張している。しかし彼等にとつては、*proportionalitatis* を本来的な形而上学的な *analogia* として考えられるところから、常にこの *analogia attributionis* は *proportionalitatis* に含まれる。すなわち *proportionalitatis* が存在する場合には必ず *attributionis* が存在すると考える。しかしこの考察も我々が前までなして来た考察からすると、カエタヌスもしくはカエタヌスに従う者の論を自ら破壊する結果を招くことになろう。というのは彼等の主張する *analogia proportionalitatis* の特徴は、カエタヌス自身が述べる(註21) *primum analogatum* の存在の否定である。——それ故にこそ彼等は形而上学的 *analogia* としての価値をこの *analogia* に附与したと考えられる——。ところで我々がみて来たトマスの *bonitas* の分析は、むしろこれに反対の結果を示してくれるのである。*bonitas* はたしかに内的な存在論的な関係を持ち、その基礎の上に立つて述べられるとしても、なお内的な存在論的類似は、*primum analogatum* に実現されている本来的な *bonitas* に依存しているのである。であればこそ我々はカエタヌスと同様この *bonitas* を *analogia attributionis* として考察することができたのである。上述の考察から出て来るものは明らかである。二つの *analogia* としてカエタヌスが考えているものは結局同一のものであるということになりはしまいか。彼等が云う “mixed”、という意味は二つのものの混在でなく、一つのものに対する見方の相異を示すのではなからうか。我々はこれを二重の *designatio* としてみて来たのである。彼等が考えた *analogia proportionalitatis* は、形式的には

attributionis と區別された analogia として考えられるが、しかし内容的には analogia attributionis と云ひ得るものではないだろうか。このように考えて来た場合、ますます我々が述べてきた考察が認められることになつて来るのである。

しかし問題がさらに残るのである。

上述のごとく問題を考えたとしても、前にも述べたごとく、少くとも analogia attributionis においては、*primum analogatum* の存在を認めることであり、これへの外的な関連において、*analogia* の *designatio* が成立するものとするならば、常にこれは「上から」の *analogia* であつて我々の形而上学的な本来的な考察にとつては容認し得ない *analogia* と考えられる。したがつてまたカエタヌスは *analogia proportionalitatis* において、*primum analogatum* の存在を認めようとしなかつたのであろう。(しかし彼が考えていたものは、実際とは異なつて *primum analogatum* を予想していたことは上述の考察から明らかである。)このように考えて来ると、今一度、*attributionis* とは異なつた *proportionalitatis* において、何を考えるべきかをカエタヌスとトマスについて考察せねばならない。これは他の稿を予想することである。^(註22)(一九六〇・一〇・三〇)

註1 Thomas De Vio Cardinalis Caietanus: *De Nominum analogia*, ed. P.N. Zammit, 1934. ch. 2.

註2 トマスはたしかに *analogia attributionis* という名辭を用いてはいない。これを相應するものとして、トマスは“*proportionis*”の名辭を用いつつゝ。(cf. *De Veritate*, 2, 11)

註³ De Pot. 3. 5: "Oportet enim, si aliquid unum communiter in pluribus invenitur, quod ab aliqua una causa in illis causetur;Cum ergo esse inveniat omnibus rebus commune,oportet quod de necessitate eis non ex se ipsis, sed ab aliqua una causa esse attribuat."

Comp. Theol. Ch. 27: "Ex eo enim quod alias res comparamus ad Deum sicut ad suam primam originem, huiusmodi nomina quae significant perfectiones aliarum, Deo attribuimus. Ex quo patet, quodsecundum rem significatam per nomen, per prius dicuntur de Deo, a quo perfectiones descendunt in alias res"

註⁴ cf. De Principii Naturae, ch. 6.

註⁵ De Verit., 21. 4: "Sic ergo dicimus secundum communem opinionem, quod omnia sunt bona bonitate creata formaliter sicut forma inherente, bonitate vero increata sicut forma exemplari."

註⁶ Ibid., ".....Omne agens invenitur sibi simile agere; unde si prima bonitas sit effectiva omnium bonorum, oportet quod similitudinem suam imprimat per similitudinem summi boni sibi inditam, et ulterius per bonitatem primam, sicut per exemplar et effectivum omnis bonitatis creata."

註⁷ Ia 6. 4; なおこれに似た表現を次の箇所に見る。I Sent. d. 19. 5. 2 ad 3; De Verit. 21. 4.

註⁸ I Sent. d. 8. 1. 2. "esse divinum dicitur esse omnium rerum, a quo omne esse creatum effective et exemplariter manet"

註⁹ I Sent. d. 19. 5. 2: "est unum esse divinum quo omnia sunt, sicut a principio efectivo exemplari, nihilominus tamen in rebus diversis est diversum esse, quo formaliter res est."

註¹⁰ しかしなお問題は残るのである。たとえ上述のことく考えられるとしても、或るものが外的な関係によつて、はじめて ens と云われる限り、創造物の世界はたんに現象としての世界として考えられ、現実の位置を占めることができないのである。ここでは神のみが實在であり、その他のものはすべて現象として仮りのものとして考えられるのである。この問題についてはなお詳細な検討が必要となつて来るが、ここでは、この問題については十分な解決がないことを指摘して置きたい。なお本稿の最後の問題点において多少触れて見たい。

註¹¹ トマスのテキストの詳細な分析を必要とするが、ここでは結論的にこれを述べた。

註12 少くとも *analogia attributionis* の名の下においてはカエタヌス自身はこれらの考察をなしてはいない。故意か、不用

意にかりについては、これに関連する問題と共に後述したい。本稿四七頁及び註18参照

註13 これはたしかにカエタヌスの *analogia attributionis* において起り得ることである。

註14 なおここでは同じ *analogia attributionis* の型で考えられるとしても、創造物と神との間の *analogia* とその他 *sanitas* の例に見るような *analogia* との間には相異があることを指摘して置きたい。前者の場合の *analogia* の内的存在論的類似ないし基礎は必然的な存在関係であり、これらのものの間の関係は相互の本質的必然的な存在論的に関連に基づいている。この世界の *ens*, *bonitas* は神から生じ、これに依存することによつてはじめて *ens bonum* と呼ばれるのである。したがつてこれは単なる知的操作によるものではない。ところで尿の場合にみられる *analogia* の基礎は必ずしも必然的なものではない。 Hampus Lyttkens; *The Analogy between God and the World.* pp. 265 ~ 66. 参照

註15 I Sent. d. 19. 2. ad I: "Ad primum igitur dicendum, quod aliquid dicitur secundum analogiam tripliciter: Vel secundum intentionem tantum, et non secundum esse;sicut intentio sanitatis refertur ad animal,

Vel secundum intentionem et secundum esse, et hoc est quando neque parificatur in ratione communi, neque in esse, sicut ens dicitur de substantia et accidente.Et similiter dico, quod veritas; et bonitas, et omnia huiusmodi dicuntur analogice de Deo et creaturis....."

註16 De Verit., 2. 11. "Prima ergo convenientia est proportionis, secunda autem proportionatitatis;Quandoque vero dicitur aliquid analogice secundo modo convenientiae; sicut nomen visus dicitur de visu corporali et intellectu, eo quod sicut visus est in oculo, ita intellectus est in mente."

註17 もちろんこの基礎ないし類似はそれぞれの存在の完全度 (*perfectio*) を考慮しているから、各項における内的類似の存在のゆゑに簡単に一義的なものとなるとは考えられない。

註18 元来、*analogia attributionis* と *proportionatitatis* は共に存在論的な関係に基づく名辭相互間の *designatio* であると考えられる。したがつてこれらの *analogia* の間に本来的な優位性はあるはずがなく、カエタヌスが考えたように、*analogia attributionis* において内的、存在論的類似への考察を無視し、あるいは故意に無視することによつて、カエタヌスについての第三の *analogia*, すなわち *analogia* の各項における *esse* の存在を取り出し、この *esse* (カエタヌスの云々 *forma*

inherens)の存在の上に立つ神と、創造物との proportionalitas を考える場合には analogia proportionalitatis, が生じて来ると考えられる。

註19 代表的なものとしては Johannes a Sancto Thoma が挙げられる。なおカエタヌス、ヨアネスの考えに従うトミストが沢山みられる。もちろん細部に亘つては多少の差は存在する。Mansar, Le Rohellec, Garrigou-Lagrange, Penido. 等が挙げられる。

註20 これは前述したヨアネス (Cursus Philosophicus Thomisticus. I. Ars Logica, Nov. ed. II. P. Q. 13. a. 4.) に基づく述べられた言葉である。この問題についてなお別の機会に主題的に取り扱いたいと思つてゐる。

註21 Caietanus; De Nominum analogia ch. 4.

註22 なお本稿を作成するに当つて次の論文を参照した。

Hampus Lyttkens; The Analogy between God and the World.

J. F. Anderson; Bond of Being.

G. M. Manser; Das Wesen des Thomismus.

G. B. Phelan; Saint Thomas and Analogy.